様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０８２３

研究課題名（和文）ムガル帝国におけるマンサブダールのプロソポグラフィのための基礎的研究

研究課題名（英文）A preliminary survey for prosopography of mansabdars of the Mughal Empire

研究代表者
真下　裕之（Mashita, Hiroyuki）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：７０３０３８９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：マンサブ（「位階」の意）制度はムガル帝国(1526-1858)の俸給制度であると同時に軍事制度、貴族制度の側面をも併せ持っている。本研究課題では、マンサブ保有者（マンサブダール）の経歴にかかわるデータを多角的かつ網羅的に原史料から収集・分析し、それらの諸事項のデータベースの構築に資する基礎研究を行った。本研究によって、データベースの素材となる基礎的資料が相当程度整備されるとともに、所要の材料を入力した試行的データベースの運用によって、従来の研究では注目されてこなかった帝国の貴族社会と文芸文化の関係、乳兄弟、贈与儀礼の重要性が浮かび上がるに至り、さらなる研究への展開の可能性を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The system of the mansab (i.e. rank) constitutes the core of the administration of the Mughal Empire (1526-1858) with multifaceted aspects of both a salary system and an aristocratic order as well as a military organization. This research project has intended to collect and analyze prosopographical data of the mansabdars (the mansab holders) of the empire by a comprehensive survey of various sources, aiming to establish a basis of a database of the Mughal mansabdars. Through this project, many of the primary sources for establishing the database have been acquired. Building and analyzing a tentative database has illuminated some of the ever-neglected aspects of the Mughal Empire such as its imperial foster-kinship, its imperial ritual of giving and its nobility in the context of its literary milieu, which have ever been neglected and need to be further studied.

研究分野：南アジア史

キーワード：ムガル帝国

１．研究開始当初の背景

ムガル帝国の人材運用において、マンサブ制度が根幹的な役割を果たしていたことに疑問の余地はない。この制度のもと、帝国に奉仕する人士はそれぞれ、数値によって表示される位階(マンサブ)を授与され、位階保有者を意味するマンサブダールという用語で総称された。ムガル帝国のマンサブ制度および貴族制度に関連した従来研究を再検討すると、検討の不十分な論点が数多く残されているばかりでなく、プロソポグラフィを構成する基礎的なデータにさえ、批判的な検証を要することが判明する。すなわち、従来の貴族研究はおおむね、「イラン系」「インド・ムスリム」などの「民族・宗教集団」（これらの概念には確たるムガル帝国史的定義が無い）からなる貴族層の「構成」の動態を保有マンサブ総数の多寡から導こうとする数量研究か、個別の有力家系の消長を記述する事例研究に終始してきたのである。一方 Athar Ali, *The Apparatus of Empire* は貴族の職歴、称号の更改およびマンサブの履歴延べ１万件あまりを年代順に配列した巨大なデータベースであり、本研究課題を含め、その後の研究に裨益するところはたしかに大きい。しかし、人物同定における錯誤、史料解釈における過誤、史料批判の不全など、基礎的なデータにおける瑕疵が、この研究成果には数多く含まれている。また収録されている事項は、上記の通り官職、称号、マンサブの履歴に限られており、マンサブダールの人生を構成するその他の多様な要素はカバーされていない。さらに、同書の刊行後に利用できるようになった史料も多数あり、根拠資料を充実させる余地は大いにある。このような従来研究の不備を克服し、信頼できる基礎的データを集積することは、マンサブ制度とマンサブダールに関する研究の建設的な進展に不可欠である。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、ムガル帝国のマンサブダールのプロソポグラフィを再構成するために、マンサブダールたちの経歴上の諸事項を総合的にカバーしたデータベースを構築することである。そのための作業には、年代記等の叙述資料のみならず、文書資料および、詩人伝、聖人伝など、幅広いジャンルにわたる一次史料に依拠しつつ、厳密な批判的処置を講ずることが必須条件である。その作業によって構築されるデータベースはマンサブ制度と貴族制度の研究の水準を大幅に引き上げるばかりでなく、ムガル帝国に生きたマンサブダールたちの社会史的な意味を多角的に解明し、ひいてはムガル帝国社会のアジア近世史における特性という比較史的な問題に答えるための、個別研究の基礎的な資料体となることが見込まれる。本研究課題が「基礎的研究」と題するのは、このような目的意識ゆえである。

３．研究の方法

本研究課題では、アクバル時代からアウラングゼーブ時代にわたる時期(西暦 1556 年～1707 年)に研究対象を設定し、先行研究の成果を批判的に参照しつつ、年代記史料、伝記資料、文書資料等を根拠資料として、マンサブダール各人の経歴を構成する各事項を採集・整理し、データベースを構築する。根拠資料となる文献群は本研究課題の観点に即して新たに整備するとともに、未公刊の手写本資料として伝存しているものについては、実地調査を行って所要の情報を収集する。以上のような研究資料の網羅的整備と総合的分析によって、マンサブダールのプロソポグラフィに関するデータベースを構築する。

４．研究成果

ムガル帝国第３代君主アクバルから同７代君主アウラングゼーブに至る時期（西暦 1556-1707 年）に属する年代記史料、伝記資料、文書資料等を根拠資料を整備した。具体的には、研究課題に関連する一次文献を購入して所属先に備えるとともに、関連する最近の研究動向をフォローするため、所要の二次文献も併せて整備した。さらに参照すべき未公刊の資料について、大英図書館等から CD-ROM に収録された画像ファイル形式で複写を購入した。また未公刊の手写本資料についての調査を実施すべく、ハイデラーバード（サーラール・ジャング博物館図書室）、大英博物館（貨幣・メダル部門図書室）、大英図書館（東洋・インド洋コレクション閲覧室）、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院図書館に赴き、研究課題に関連する研究資料を調査・閲覧し、その一部について電子複写ないしデジタルカメラによる写真を入手することが出来た。また関係する資料を電算化して効率的な整理・分析に資するべく、大型判高速スキャナを購入し、所属先に備えた。

以上によって、マンサブダール各人の経歴を構成する各事項を採集・整理し、電算機上でデータベースを構築する作業を進めた。具体的には、マンサブダール各人の経歴を構成する制度史上・社会史上・文化史上の諸事項について検討し、データベースのフォーマットの設計を進めるとともに、根拠資料から採集された事項を、テキストファイルの形で蓄積する一方、所要のデータについては試験的にデータベースにインポートした。

以上の作業を通じて得られた基礎的データを直接的・間接的に利用することで、以下のような成果を導くことが出来た。

(1) 貴族社会を律する君主権の実態の一側面を解明すべく、文献資料と貨幣資料を用いて、デリー・スルターン朝時代とムガル帝国時代とで、君主権と正統性の論理が異なるのではないかとの展望を得て、これを学会発表によって報告した。

(2) デカン地方のムスリム諸政権における

人士の動向をムガル帝国の諸事例の参照系とすべく、同地方に行われた歴史叙述に垣間見られる人的移動の諸相を検討し、その結果を論文として公表した。
(3) ムガル帝国時代の制度史研究上の重要文献である『アーイーニ・アクバリー』に関する文献学的研究を継続させ、その成果を日本語訳注として刊行したが、注釈に付した知見には本研究によって得られた成果が生かされた部分もある。
(4) ムガル帝国の社会を特徴づけたペルシア語文化の展開がマンサブダールの知的生活と密接な関連を有するとの展望から、研究発表を行い、有益な示唆を参加者から得ることができた。さらに追加的な調査と考察を進めているところである。
(5) マンサブダールの経歴の検討から、帝国宮廷における人的結合の一側面として、乳兄弟の特徴とその重要性が見出されるに至り、その知見を学会発表において報告し、さらに追加的な調査と考察を進めているところである。
(6) マンサブダールの経歴の検討から、帝国宮廷における贈与儀礼の重要性が浮かび上がるに至り、その知見をもとにした研究発表を行い、参加者との討論から論点を精緻化させる手がかりを得るとともに、今後、他の研究プロジェクトと緊密な連携を取りつつ、本研究で得られた基礎データをもとにした贈与行為全般への研究への展開を構想しているところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　10　件）

①真下　裕之「クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺：インド洋西部海域における人的移動の諸相」『西南アジア研究』 86，2017 （掲載決定済。印刷中）.査読有
②真下　裕之監修（二宮　文子・真下　裕之・和田　郁子訳）「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (5)」『紀要』（神戸大学文学部） 44，2017，pp. 49-88.査読無
③真下　裕之監修（二宮　文子・真下　裕之・和田　郁子訳）「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (4)」『紀要』（神戸大学文学部） 43，2016，pp. 35-73.査読無
④真下　裕之「近世南アジアにおける人的移動の記録と記憶 ： デカンのムスリム王朝の出自説をめぐって」守川　知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会 2016，pp. 33-58.査読有
⑤真下　裕之「17 世紀初頭デカン地方のペルシア語史書 *Tadkirat al-Mulūk* について」近藤　信彰編『近世イスラーム国家史研究の現在』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2015，pp. 197-232.査読無
⑥真下　裕之「世界史 Q&A ムガル帝国の公用語やイスラームとの関係について教えてください」『歴史と地理 689 世界史の研究』245，2015，pp. 47-49.査読無
⑦真下　裕之監修（二宮　文子・真下　裕之・和田　郁子訳）「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (3)」『紀要』（神戸大学文学部） 42，2015，pp. 113-151.査読無
⑧真下　裕之「「インド史」の成り立ちについて：「イスラーム」と南アジアの「在来社会」」今松　泰・澤井　一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相：在来社会との接触・交流と変容』人間文化研究機構地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」 2015，pp. 1-22.査読無
⑨Hiroyuki Mashita, `Asad Beg Qazvīnī', Kate Fleet et al. (ed.), *The Encyclopaedia of Islam, THREE. 2015-2*, Leiden / Boston, 2015，pp. 29-31.査読有
⑩真下　裕之「ムガル朝インドの写本と絵画」小杉　泰・林　佳世子編『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会 2014，pp. 279-297.査読有

〔学会発表〕（計　9　件）

①真下　裕之「「ムガル帝国宮廷における贈与儀礼：マンサブ制度の一側面として」平成 28 年度第 4 回「ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開」研究会 2017.3.31、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス（東京都）
②真下　裕之「アズファリー著『サーニハート』の新発見写本について」共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」2016 年度第２回研究会 2017.3.27、東京外国語大学（東京都）
③真下　裕之「ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」国立民族学博物館共同研究「「近世カトリックの世界宣教と文化順応」研究会 2016.12.18、国立民族学博物館（大阪府）
④真下　裕之「ムガル帝国の武人とマンサブ制度：『アーイーニ・アクバリー』の叙述より」平成 27 年度第 3 回「ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開」研究会 2015.12.26、九州大学（福岡県）
⑤真下　裕之「インドのムスリム諸政権とカリフ―デリー・スルターン朝時代からムガル帝国時代へ」平成 27 年度九州史学会、イスラム文明学部会 2015.12.13、九州大学（福岡県）
⑥真下　裕之「マンサブ制度における人的結合の一側面：ムガル帝国の乳兄弟」2014 年度第 3 回「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」共同利用・共同研究課題研究会、2015.3.28、東京外国語大学本郷サテライト（東京都）
⑦真下　裕之「ムガル帝国における君主と軍

事集団」平成 26 年度九州史学会、イスラム文明学部会 2014.12.14、九州大学（福岡県）
⑧真下　裕之「「インド史」の成り立ちについて：「ヒンドゥー時代」と「ムハンマド教徒時代」」NIHU プログラム・地域研究間連携研究の推進事業「前近代南アジアにおけるイスラームの諸相―在来社会との接触・交流・変容―」2014.10.5、京都大学（京都府）
⑨真下　裕之「近世南アジアにおける人的移動の記録と記憶」シンポジウム「人の移動・移住とその記録――陸と海の近世アジア」2014.9.21、北海道大学（北海道）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

６．研究組織
(1)研究代表者
真下　裕之（MASHITA, Hiroyuki）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：70303899